

中央教育審議会答申から改めて読み解く 「キャリア・パスポート」が 描く生徒の未来

文部科学省／
国立教育政策研究所

長田 徹

おさだ・とおる ●石巻市立雄勝中学校社会科教諭、仙台市教育委員会指導主事などを経て、2011年5月から文部科学省。現在、初等中等教育局 教育課程課 教科調査官、同児童生徒課 生徒指導調査官、国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 総括研究官、同教育課程研究センター 教育課程調査官を併任。

平成28年12月の中教審答申において、ポートフォリオ的な教材として明記された「キャリア・パスポート(仮称)」。その狙いとともに、キャリア教育の視点から、学びをつなぐことの意義や教員が対話的に関わることの重要性について、文部科学省で生徒指導調査官などを務める長田 徹氏に伺いました。

取材文／堀水潤 撮影／西山俊哉

ポートフォリオと 「キャリア・パスポート」

小・中学校を中心に、作品や感想文などの成果物を蓄積し、学びのプロセスを振り返ることができるポートフォリオを活用している学校は多いと思います。そうした機能に加え、児童生徒のキャリア形成にも大きく関わり、しかも、学年、さらには小・中・高校と学校段階を越えて持ち上がる

ことまで見越したポートフォリオ的な教材のことを、文部科学省では「キャリア・パスポート(仮称)」と呼び、導入と活用を進めようとしています。※以下(仮称)は略。

今年3月に告示された新高等学校学習指導要領の第5章 特別活動の項目には、「学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につながり、将来の在り方生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、生徒が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」という記述がありますが、まさにその教材のことです。普

及・定着事業による調査研究などを基に、今年度中に例示が出され、別途、先行実施や移行措置について示される予定です。前述の調査研究のスケジュールにおいては、まず高校で基盤を整えたいうえで、小・中学校からうまく持ち上がるのが期待されています。

ただ、ポートフォリオという大きな概念はともかく、それに含まれる「キャリア・パスポート」について、高校の先生方に十分ご理解いただいているかといえ、そうとは言い難い現状があります。そこで、なぜ必要とされているのか、新学習指導要領の基となる中央教育審議会(以下中教審)の答申に戻り、学習評価やキャリア教育の観点から整理したいと思います。

学習評価とキャリア教育の 視点から見たポートフォリオ

中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(平成28年12月21日)において、「ポートフォリオ」という用語



図1 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)より抜粋

- >>p56 ● このように、小・中・高等学校を見通した、かつ、学校の教育活動全体を通じたキャリア教育の充実を図るため、キャリア教育の中核となる特別活動について、その役割を一層明確にする観点から、小・中・高等学校を通じて、学級活動・ホームルーム活動に一人一人のキャリア形成と実現に関する内容を位置付けるとともに、「キャリア・パスポート(仮称)」の活用を図ることを検討する。
- >>p63 ● また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていく必要がある。さらには、総合的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たち自身が把握できるようにしていくことも考えられる。
- また、子供一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることが重要である。そのため、子供たちが自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付けることが適当である。例えば、特別活動(学級活動・ホームルーム活動)を中核としつつ、「キャリア・パスポート(仮称)」などを活用して、子供たちが自己評価を行うことを位置付けることなどが考えられる。その際、教員が対話的に関わることで、自己評価に関する学習活動を深めていくことが重要である。
- >>p106 ● 具体的には、第1部第8章で述べた「キャリア・パスポート(仮称)」などを活用して、生徒一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりすることができるようにすることが重要である。こうした自己評価に関する学習活動に、教員が対話的に関わり、目標を修正するなどの改善に生かしていくことや、複数の教員に関わり、一人の生徒を多面的に見てその生徒の個性を伸ばす指導へとつなげていくことも期待される。
- >>p234 ● 教育課程全体で行うキャリア教育の中で、特別活動が中核的に果たす役割を明確にするため、小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材(「キャリア・パスポート(仮称)」)を作成することが求められる。特別活動を中心としつつ各教科等と往還しながら、主体的な学びに向かう力を育て、自己のキャリア形成に生かすために活用できるものとなることを期待される。将来的には個人情報保護に留意しつつ電子化して活用することも含め検討することが必要である。

※下線は編集部による

図2 「キャリア・パスポート(仮称)」とは

- 児童生徒が自らの学習活動等の学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な存在
- 記述するワークシートは児童生徒の発達段階を踏まえた構成とし、小学校から高等学校までの「学びの記録」とする
 - ワークシートの散逸を避け、有効に振り返りができるように小学校から高等学校までの記録を一冊に綴じ込むこととする
 - 国及び教育委員会が示すワークシートを参考としつつ、地域の実情や各学校の特色等に応じたワークシートを作成する
 - 進級進学時には、次の学年・上級学校に持ち上がり、継続的かつ系統的に蓄積する

※文部科学省資料より。文部科学省「キャリア・パスポート(仮称)」普及・定着事業では、都道府県教育委員会等(奈良、福岡)において調査研究を実施しています。詳しくは、23ページを参照。

が本文で最初に記述されるのが「何に身に付いたか」学習評価の充実」について書かれた第9章です。その中の「評価に当たっての留意点等」という項目では、「多面的・多角的な評価を行っていくこと」「総合的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に依りて、学習の過程における形成的な評価を行い」と述べられています。

す。(図1、②段目) いわゆる観別評価や数値で表せるような評定はわかりやすいですが、これで子どもたちの学びをすべて測れるかという点ではありません。関心・意欲・態度と呼ばれる学力の要素については評価の基準が曖昧で、例えば「関心がある」ということを授業中に何回手を挙げたか数えたり、「意欲がある」ということをノートを集めて見やすいかどうかでABC判定したり。これでは本当の意味で子どもたちの力を見ているとはいえません。結果は伴わなかったけれど努力をしている、といった学習の過程や、学びの中で本人がどう成長したと感じているかなども含めて評価しようということですね。

同項目には、「自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることが重要」ともあります(③④段目)。見通しをもつて振り返ることは人が生きていくうえでの基本です。この重要性については現行の学習指導要領にも丁寧に書かれています。具体的などう行うかについては触れられてきませんでした。そこで今回、ポートフォリオという言葉を用いて、そのうち「教員が対話的に関わる」こと(③④段目)。「特別活動」を

自らを振り返り、紡ぎ これからを見通す

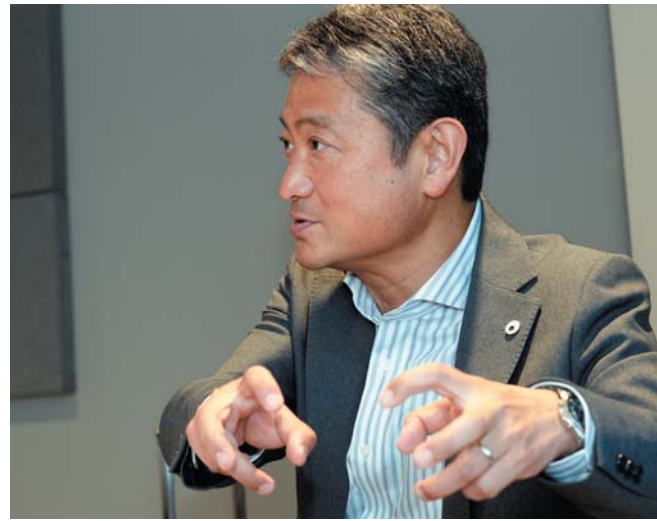
中核としつつ教育課程全体でキャリア教育を行うこと(①③⑤段目)。「将来的には個人情報保護に留意しつつ電子化」すること(⑤段目)など、その骨子が述べられています。

一人ひとりの学びをつなぐ 小・中・高連携の具体的ツール

冒頭で述べたように、既に多くの小・中学校ではポートフォリオ教材が使われています。しかし、残念なことには、進級し、担任が変わると引き継がれることはまれ。せっかく1年間、学習や体験したことを蓄積し、「こんな失敗をして、そのときこう感じた。だ

生徒一人ひとりの

学びをつなぐ



大切なのは教員の働きかけ 話すだけが「対話」ではない

ポートフォリオ、「キャリア・パスポート」には、教科・科目、特別活動、課外活動や家庭・地域での学びを生徒自身がまとめ、紡いださまざまな記録が蓄積されるわけですが、それだけでは単なる記録集。それを生徒のキャリア形成につなげられるかどうかは、教員による意図的な対話、働きかけにもかかっています。例えば、

——先生が「語る」ときは、「あなたは どうしてそう思うの？」というように 子供たちの考えを引き出すよう意図 することが大切です。子供に「語らせ る」ときは、耳を傾けて受け止めるよ う心掛けることが大切です。生徒同 士に「語り合わせる」ときは、自他の 違いに気付き、それを受け入れるよ う促していくことが大切です。

以上は、国立教育政策研究所発行 のリーフレット「語る」「語らせる」「語 り合わせる」で変える！「キャリア教育」 に掲載された働きかけのヒント。学校 におけるキャリア・カウンセリングその ものです。ぜひ、参考にしてください。

対話といっても、話すだけとは限り ません。例えば、生徒が残した記録 に対して、「がんばったね。こういうと ころに努力の跡が見えるね」と、丁寧

に感想を書き込んだり、話したりす る時間がないのであれば、赤ペンでアン ターラインを数カ所引くだけでもいい のです。それだけで、「あなたの様子、 担任は見えていますよ」というメッセージ になるはずです。

思春期には、否定的な記録を残す 生徒もいます。例えば、進路アンケー トに「やりたいこと、特になし」と書 く。しかし、「特になし」と書くから には何かある。人間関係で苦しんでい るのかもしれない。そんなとき、強 制的に「書け」「振り返れ」という指導 は不要。じつと寄り添ってあげてくだ さい。いつか不安定な時期から脱し、 自分を振り返ることができたとき、 「特になし」と書かれた記録が、意味 をもつこともあるはずです。

生徒の自己評価⇨学習活動 学習評価の資料としては有効

学びの過程を蓄積したポートフォリ オ。これを、大学入学者選抜や就職 活動で活用できないかと問われれば、 もちろん活用できます。「活動報告 書」や「志望理由書」を書くにしろ、 面接や小論文で「あなたの学びを振り 返ってください」という質問やテーマに 答えるにしろ、丁寧に積み重ねてき た記録をもち、そこから思いを形にし てる人と、薄れた記憶に頼らざるを

から、来年はこんな工夫をしたい」な ど、見通しをもって振り返ったり、教 員や友人との対話を通じて自分を客 観的に理解したりする機会があつた わけですから、学年が上がりクラスが 変わつても、それを引き継がなくては もつたえない。「今の学びが将来、何か に姿を変えていく」ことが意識できれ ば、内発的動機付けによる学習意欲 の向上にもつながるはずです。

それに、ポートフォリオは、自己理 解を深めるツールであると同時に、教 員にとつては、生徒理解を深めるため の貴重なツールでもあるのです。しか も、「キャリア・パスポート」の場合、 学校段階を越えての活用が期待され ている点がポイント。一般に、その生

徒が入学前、どんな活躍や努力をし てきたか、上級学校の先生は内申書 に書かれたこと以外、ほとんどわかり ません。その、見えない壁が低くなる わけです。

私が籍を置く生徒指導・進路指導 研究センターの調査によると、高1で の中途退学・不登校傾向は、授業や 学校行事の参画意識と相関があるこ とが明らかになっています。高校入学 前のこうした情報を高1の担任がもっ ていれば、一歩進んだ生徒指導ができ るでしょう。

個々の子どもの中では学びはつな がっているのに、学年や学校段階で指 導が途切れては残念。「学びをつなぐ」 ことは教育の本質です。



国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター発行のキャリア教育リーフレットシリーズ特別編1『キャリア・パスポートって何だろう?』(平成30年5月)等では、キャリア教育におけるポートフォリオの重要性を解説。実践事例も紹介されています。詳しくは下記を。
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/3.htm#sinro>

得ない人とは、深みが違ってくるのは明らかです。

ただし、生徒が日常的に蓄積したものをそのままコピーして入学者選抜に使うことは適当ではありません。というのも、ポートフォリオも「キャリア・パスポート」も自己評価。「評価」といつてますが、自己の変容や成長を言語化する「学習活動」です。

先の答申における「自己評価を行うことを、教科等の特質に応じて学習活動の一つとして位置付ける」(③段目)という一文は、まさにそれ。

一方、成績をつけるなどの「学習評価」は教員が行うもの。生徒の学習活動を基に教員が対話的に関わりながらしていくものです。その意味で、学習活動である自己評価が、そのまま学習評価になってはいけません。

子どもたちの宝であり超大作 自分を支えてくれる生きる糧に

さて、小・中・高と持ち上がること

自己評価という 学習活動をどう促すか

を想定した「キャリア・パスポート」ですが、高校までの学びでとじるものではありません。進学先のゼミなどで、これからのキャリアを見通す材料として、教員の学生理解に使われることも期待されています。

社会に出てからも同様。例えば、職場において理想とのギャップに悩み、精神状態がネガティブになっていたりします。そんなとき、「あのとき、苦労したけれど、担任に励まされたなあ」とか、「地域の人たちの役に立てて嬉しかった」など、具体的なシーンを思い出すきっかけにもなる。いざとい

うときの心の拠りどころです。

私事ですが、母親が長年書き溜めたメモやアルバムは、いわば私のための「キャリア・パスポート」でした。中学校教師として、思春期の生徒を預かる立場になった私に、不安でひ弱だった中学生時代の自分を思い出させ、生徒一人ひとりに寄り添うことの大切さを繰り返し教えてくれました。

もし私自身、中高時代からそうした学びの足跡を自ら綴っていたとしたら、どんなに今、勇気づけられるか。それは、学校生活を通して蓄積してきた「超大作」。その当時は、実感で

きないとしても、社会に出たとき、「こんな宝物もつて卒業したんだ」ということが大きな自信になり、生きる糧になると私は思っています。

セキュリティや管理、時間確保の問題、先生方の資質・能力の向上など、課題は多く、国の制度として定着させるためには、時間がかかるでしょう。けれど、子どもたち一人ひとりの学びの継続性を担保するためにも、学習意欲を促すためにも、子どもたちの自己理解や先生方の生徒理解のためにも、今、始めなければならない取り組みだと思っています。

